ＩＳ・真の決闘者の闘い

ハッスル０００

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ・真の決闘者の闘い

【Ｎコード】

Ｎ５８３６Ｘ

【作者名】

ハッスル０００

【あらすじ】

闘い儀を終えて数ヵ月後、デュエルに伸び悩んでいた城之内克也は道を歩いていると一枚のカードを拾う。そしてカードから放たれた光に飲み込まれた城之内の行き着いた先は女尊男碑の世界だった。

これは遊☆戯☆王とインフィニット・ストラトスのクロスオーバーです。

0　ターニングポイント（前書き）

前回までのは間違えて消去してしまったため、内容を元に戻し、加筆修正して再投稿です。

0　ターニングポイント

ここは童実野町のとある公園。そこには二人の決闘者（デュエリスト）が決闘を繰り広げていた。

「真紅眼の黒竜でダイレクトアタック！黒炎弾！」

「うわー！」

デュエリストの命令に従い真紅の燃えるような赤い眼に磨き鍛えられたダイヤモンドの様な光沢を放つ黒い体を持った伝説種の黒竜が口から火球を吐き出し、相手に着弾して火柱を上げる。

「うっしゃー！俺の勝ちだな！」

彼の名は城之内克也。童実野町に在住するデュエリストだ。そしてそんな彼と共に勝利の雄叫びを上げるのは真紅眼の黒竜。城之内克也の誇る切り札である。

闘いの儀を見届け一ヶ月。城之内は相も変わらずデュエルに明け暮れていた。

彼は幾つものデュエルを終えると公園のベンチに腰を下ろす。その顔はデュエルの時とは違い、思い悩んでいる顔だった。

「（違う…何かが違うんだ…こんなデュエル繰り返したってなんにも変わりやしない）」

城之内はデッキを装填した決闘盤に目を落とし、溜め息を吐く。
城之内は伸び悩んでいた。いくらデュエルをしても強くなった感覚を得ないのだ。

「（こんなんじゃアテムに…いや遊戯に追い付けない）」

城之内は自分より先に居る今は亡き友の名と、変わり、自分を変えてくれた友の顔を思い出す。

「（アイツらに追い付かねーと…俺のデッキに示しがつかねー）」

城之内は自分のデッキをディスクから取りだし手の中で広げる。そこには城之内の戦友たちが描かれたカードがいた。

そして城之内は一枚のカードを取り出す。

「（レッドアイズ…俺はどうしたら良いんだよ…）」

城之内は自信のエースに問う。しかしレッドアイズと言えどカードでしかないレッドアイズから言葉は返ってこなかった。

城之内はあの後、兎に角デュエルをしようと考え無我夢中でデュエルをしていた。そして気が付けば日は落ちきっており、街の街灯が輝きだしていた。

「やっべー、遅くなっちまったかな」

城之内はデュエルディスクを着けたままの腕を振りながら走っていた。

「（結局変わんなかったな…）」

城之内はどうしたら良いものか考えながら走っていると草むらの中にカードを発見した。

「ん。カードか？」

城之内はUターンで草むらまで走り、カードを取り出す。

しかし

「なんだこりゃ？白紙じゃねーか？」

城之内の拾い上げたカードには本来有るべき絵はなくただの白紙だった。

「（なんだよ。得したと思ったのに）」

城之内は拾い上げたカードをブラブラさせながら立ち上がる。

すると突然白紙だったカードが震え出す。それと同調したかのように城之内のデッキも震え出す。

「な、なんだ？」

すると手に持ったカードから城之内を食い殺す程の光が放たれた。

「う、うわー！」

城之内を食い殺した光が収まった所には城之内克也は居なかった。

1　違う世界の暴君教師（前書き）

私の中では千冬様は最強だと信じてます。それに城之内にチートなんて似合いませんし、彼は誰かに弄られてこそだと思います。ですので千冬様の性格が原作とは少し違うかもしれません。

1　違う世界の暴君教師

おかしい。今の俺の状況は正しくそれだと思う。

頭が悪い俺にはこの状況に対する例えも、ましては答えなんて見つからない。

今までだって非現実には馴れていると言う自負はある。闇の決闘、臨死体験、魂の封印、３０００年前のエジプトにタイムスリップ、今思えば懐かしい。しかし駄目だ。俺にはわからない。理解したくもない。

何だって…！俺は…！

「捕まってんだよーー！！！（泣）」

マジでわかんねー…

事の始まりは簡単。

あの光に飲み込まれた城之内は目を醒ましたらそこは土の敷き詰められたグラウンドだった。

城之内は訳が分からず呆然としていると

ガシャン！ガシャン！ガシャン！ガシャン！　ガチャ×４

急に空から降ってきたおかしな鎧を纏った女性に包囲&捕獲と実に１秒が刹那に感じるスピードで城之内は捕獲された。

そして状況が飲み込まめない城之内が突っ伏している間に後ろから手錠＋首筋に手刀をプレゼント。格闘アニメ顔負けの早業で気絶した城之内は速やかに連行されるのだった。

そして起きた城之内を待っていたのは黒いスーツを着た女性。艶のあると言うのか兎に角女性特有のきめ細かい黒髪に、威圧感を感じさせるがそれを踏まえても整った顔立ちに大人特有の色香を感じさせる。

城之内は思わず見とれてしまう。しかしその後待っていたのは容赦と仁義なき取り調べ。侵入目的から始まり、名前、生年月日、血液型、住所、電話番号、家庭環境、家族の名前、仕事かアルバイト経験、勤務場所の連絡先。どうでもよさそうな情報も全て掘り起こされた。城之内も意味不明☆な状況だったので考えがまとまらなかったのと女性、織斑千冬（名前を話した時に教えて貰った）の放つ百獣の王のオーラに城之内も逆らえずありのままを話した。

そしたら意外にもこの織斑千冬と人物は話しは聞いてくれる人で、城之内の話しは口を挟まず聞いてくれた。

そして城之内もありのまま全てを話した。カードを拾い、気がついたらここにいたことも。普通の人物なら妄言だとバッサリ斬るだろうが織斑千冬は城之内の話を最後までちゃんと聞き、確認してくると言い部屋を出た。

そしてやっと状況を理解した城之内の叫びが冒頭のそれだ。

なんだよこの状況！俺がなにしたんだよ！千冬さんみたいな美人に会えたのは幸せだけどそれ以外は不幸以外なんでもねーよ！

「あー…なんなんだよマジで…」

俺は鼠色の天井に問いただす。しかし天井に、ましてや鼠色の天井には無理があったか、答えは返ってこない。ドチクショウ！

俺は天井よろしく鼠色の机に頭を叩き込む。人間追い詰められたら意味不明な行動を取ったり、電波を受信するらしい……邪神井う……ＡＧＯ…作画ほ…どうやら受信したらしい。この頭突きも意味不明な行動の一種だ。取り合えず夢覚めろ。の意味を込めた。

結果。痛くて顔が上がらない。

つーか冗談抜きで痛い！海馬のキャリーアタックや本田のパンチより痛い！

俺は額を擦りながら起き上がり机を見る。そこには鼠色なのにデュエルディスク以上の硬度をもった机がある。メタリックな色より鼠色のが硬いのか！いいのかＫＣ！机に強度負けてるぞ。

「思ってたより元気だな。飯を持ってきてやったぞ」

「飯！」

正直状況飲み込みんだら腹が減ってきてたんだ。流石千冬さん。美人は違うね（キラ☆）お礼に俺のモノマネを

「モノマネなぞいらん。さっさと食え」

「へーい、そうですk…ヴェエエエ！なんで俺の考えてることが！」

「読心術だ」

「独身術？」

バギャ！！

「ゴキャアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ちっとふざけただけなのに顔面を机にドッキングされた。鋼鉄の鼠色は傷付かず俺は顔面陥没のピンチ到来！！

「汚れが付いたか」

パンパンと千冬さんが手を合わせて叩く。その音も心なしか綺麗に聞こえるのは千冬さんが美人だからだろう。美人は何しても映えるからな。

「反省が足りんか…」

「すんませーーん！！マジでチョーシこいてすんませんでした！！」

机にダイブして謝る。だからそのパキパキ鳴らした手をしまってく

ださい。

「はぁ、取り合えず食え」

千冬さんは机の脇の台座に乗せていたお盆から味噌汁と白米に漬け物を出す。白米の隣の海苔が良いアクセントだ。これは日本人の和食の陣。日本人として愛するべき和食の基本形態にして究極の構えだ。これを出してくれるなんて…

「いただきます！！」

俺はお手手のシワを重ねて頭を下げる。千冬さんもうんうんと頷いていた。

先ずは白米のお椀を左手に持ち右手に箸を持ち一口。

「うめー！」

俺は味噌汁に手を伸ばした。

至高の和食タイムも終わり今は千冬さんとの尋問タイム。どんなことを聞かれるかびくついていたが千冬さんの第一声は尋問ではなく、確認だった。

「城之内克也。１６歳。１月２５日生まれ、水瓶座に血液型はＢ型、家族構成は父と二人暮らしで母は離婚、妹は母の元で暮らしている。これに嘘偽りはないな？」

「お、おう」

「そうか…」

千冬さんは溜め息を吐き俺を見る。

「いいか城之内。落ち着いて聞け。命令だ」

「は、はい」

うわー、見事に脅迫紛いな命令だ。俺の意見は全面的に無視な方向らしい。

「なら単刀直入に言おう。調べたところ城之内克也と呼ばれる人物の戸籍及び童実野町と呼ばれる町も存在していない」

・・・・はい？

「へぇ？ここは地球なんすよね？童実野町がない？まさか…」

「信じがたいが『異世界』みたいだな」

千冬さんは俺が否定したかった事実を喉元に突きつけた。

「さて落ち着いけ城之内。冷静さを失ったら何かが変わるわけでは

ない。人間諦めが肝心だ」

「いや、冷静でいろって結構無理があると思うだけど！！」

「いや、可能だ。先ずは口を閉じて鼻を塞げ。そのまま眠るように目を閉じれば思考も冷たくなるだろう？」

「それ思考だけじゃなくて体！ボディも冷たくなるだろ！」

「いっそう冷たくなればいいだろう。何も考えなくてすむぞ」

「嫌々！違うだろ！！俺はこれからどうなるんすか？ずっとこんまんま拘束ってわけじゃないすよね？」

「なんだ拘束されてたいとは…とんだドMだな」

「俺はドMじゃねー！！ノーマルだ！」

「さてお前の処遇だが…」

「話が戻った！？まぁそれを望んでたわけなんだけど…」

「東京湾にコンクリで詰めて沈めることに決まった」

「理解不能！！意味不明☆」

「理由は私からの必死の演説のお陰だ。解放。生温いと」

「あんたが原因かぁあああ！！」

「違う。了承した上の責任だ」

「元はあんたのせいだろうがぁあああああ！！」

俺はチタン机に乗り掛かる形で千冬さんに一喝する！

「まぁ、冗談は終わりにして本題に移るか」

「はじめっからお願いします！」

千冬さんは「せっかちな」とかいいながら足元に手を伸ばす。せっかちになったのはあんたのせいです。

「これがお前の処遇だ」

千冬さんは一枚の紙とカードを差し出してきた。

「なんすかこれ？紙に…カード？」

俺は紙を持ち上げる。そしたら紙の右上の文字に目が行った。

編入届け

「……はぃ？」

「なんだ編入届けすら知らんのか？余程のバカなんだな」

「ちげーよ！なんで編入届けがあんだよ！？」

「それはここが学校だからだ。ＩＳ学園。この世界じゃかなり有名

だ」

まぁ、異世界から来たお前は知らないか。と千冬さんはめんどくさそうに呟く。

「ＩＳ学園とはＩＳ、通称インフィニット・ストラトスと呼ばれるパワードスーツの操縦者を育成する学園だ」

「インフィニット・…ストラトス…？」

「元は宇宙での活動を目的に開発されたらしいが結局その計画は頓挫したものだ。人間一度作った自信作は用途は違えど自慢したくなるのだろう」

「へ、へぇ？」

「詳しい話しはせん。だるいからな」

「はぁあああ！！教えてくださいよ」

「まぁ、重要なことは教えてやる。感謝しろ。地に伏せろ」

「酷い！！」

うううぅ…なんで異世界に来て早々こんな目に…

「では話すぞ。まずこの世界はお前の居た世界と風潮が違う。この世界ではな男性より女性のほうが偉いらしい」

「女性のが偉い？」

「あぁ、理由はＩＳにある。ＩＳは原因はわからんが何故か女性にしか扱えんのだ。そしてＩＳには兵器としてあまりに高すぎる性能を有している。軍用基地すらＩＳの前にはただの烏合の集だろうな。そんなんだから世の中の女性は男性より自分達のほうが強いと考えたのだ。これが女尊男碑の始まりだ」

「……半分も分からなかったが大丈夫だ。いける」

「そうか、なら続けよう。そんなこんだで世界は見事に女尊男碑の世界になってしまったわけだ。しかし最近それに風穴らしき物が空いた」

「風穴？」

「男性のＩＳ適合者が発見されたのだ」

「えっ！千冬さんさっきＩＳは女にしか使えねーって…」

「だからこそ風穴を開けるのだ。今まで女性にしか使えなかった力を使える男。世界はこれを放っておくほどバカではないからな。それは今はこのＩＳ学園にいる」

びっくりだぜ。あんまわかんねーけど…

「まぁこんなところだ。お前の処遇の話しに入るぞ。異論は認めん」

「は、はぁ…」

「お前の処遇はＩＳ学園への編入だ」

「は？」

そういや…でもだって…

「ＩＳ学園って男は入れないんじゃ？」

「そんなことはない。ＩＳ学園に入る条件はＩＳ適合者かどうかだけだ。例え男だろうがＩＳ適合者なら通学資格はある」

「へ、だけど男はＩＳは使えない…」

俺が言い切る前に千冬さんは俺に突き出した一枚のカードと懐からカードの束…ってそれは！！

「貴様のデッキだろ。良かったな貴様はこれのお陰で助かったんだ」

「俺が…デッキに助けられた…？」

「そこに白紙のカードがあるだろう。そいつは検査の結果ＩＳだと言うことが判明した」

「これがＩＳ！！」

俺は白紙のカードをつかみとる。それは俺にはただのカードにしか見えない。

「そのカードの結果の過程で同一の素材で出来た貴様のデッキを検査させて貰った。案の定このデッキはそのカードに共鳴した」

「……」

話はカッ跳んでて分からねぇけど…

「千冬さん…俺のデッキを返してください」

「…ほら」

俺のマジな雰囲気を察してくれたのかデッキは返ってきた。

「…」

俺はデッキの中に白紙のカードを入れ込む。

その瞬間はあまりに衝撃的だった。自分の体を包んでいく光の感覚。

それがあまりにもリアルだった。

光が収まるとそこには

「やはりな…これで晴れてＩＳ学園の生徒だな城之内」

ＩＳを身に纏った俺がいた。

1　違う世界の暴君教師（後書き）

次回は鈍感バカとの出会いです。爆発すればいいのに。城之内のＩＳ紹介はその後だと思います。ちなみに最近銀河竜軸のフォトンデッキを組みました。トラップスタンとフォトンケルベロス３積みしたらトラップが恐くない！そしてアシットゴーレム？エクシーズギフト？強制転移の流れが強すぎる。カイトデッキ１のコンボです。エクシーズギフトは基本エクシーズを多用するカイトデッキ必須のドローソースです。ジェムパに使えば損害ゼロですしね。そして意地でチューナはゼロのエクストラエクシーズ縛りです。サイドにはバルブ君とゾンビが控えています。流石にゴーズ無しはロマンが有るけど弱すぎる。ゴーズならうまくいけば銀河が出せますし。サイドラは３積み安定。カイトの使ったナンバーズはゴーレムしかエクストラに入れてません。あいつら雑魚だもん。

2　友達と決闘の約束（前書き）

展開早いかな…

2　友達と決闘の約束

突き刺さる好奇な視線と言う槍が俺を貫く。その幻想はかなりリアルだった。何たってクラスの全員から注がれているからだ。このままでは俺は弐号機よろしく槍に串刺し決定だ。つーか現在進行形…だったけな？

くそ…いくら城之内さまだからってこの空気は無理だ。動物園の動物達の気持ちがよくわかる。あいつらも苦労してんだよな…

そう言えば山田先生の胸でかかったな。杏子や舞とは違ってふんわりした雰囲気があって素直に赤面できる。柔らかそうだ。

「よし戻ってこい城之内。後2秒で戻って来なかったら殺す」

「ラージャー！！」

コンマ2秒、刹那の反応だ。

「それでは改めて編入生の紹介だ。コイツも織斑の後に発見された男性適合者だ。別に仲良くする必要はない」

「「「はい！」」」

「いやいやおかしいおかしい！！何満場一致で無視決定してんの。つーか息ピッタリ過ぎだろ！！」

「このように織斑と同クラスのバカだ」

「あんた酷くね！！」

スパーン！！

閃光一閃、光の早さで降られた出席簿が俺の頭を貫く。つーかなんでこの人の出席簿はこんなにいてーんだよ！

「だれがあんただ。織斑様と呼べ」

「先生じゃねーのかよ！！」

スパーン！

ダァィニダァ！！

「様と呼べと言ったろうが！！」

「マジなのかよ！」

「失礼な、私は冗談は言わん！」

「もうやだぁー！」

うう…何だって俺がこんな目に…

おれが教壇の上でこの世に対しての怒りに支配されていたら目の前の男子と目があった。そいつの目は俺に対する理解と同情の念が籠められていた。

「（分かるよ）」

「（…ありがとう…ほんとうに…ありがとう…）」

俺達は会話するまでもなく友達になった。

「…でして…」

あれから地獄の自己紹介を終えた俺は優しい優しい女神、山田先生に言われて空いていた席に座り、昨日渡された教科書片手に授業を受けて

「…ｚｚｚ…」

ませんでした。

だーてー、ここに書いてあること一切理解出来ないし、昨日この世界に来たばかりの俺にどうしろと？だから寝るのさ。ははWWW

「起きんか愚か者！」

スパーン！と本日3回目の千冬様からの有り難き愛の鞭が俺の頭な炸裂する。千冬様も照れ隠しがうまいことで。

ズガァァァァーン！！

「ギャァァァァァァ？ァァァ！！」

頭が教科書にめり込まされたぁああ！しかも出席簿じゃなくて素手

だぁあああ！

「さて、山田先生。授業を続けてくれ」

「あの…城之内君は…生きてますか？」

「コイツの生命力はゴキブリのそれと同じだ。心配するな」

「だれがゴキブリだぁあああ！！」

山田先生＋全生徒「「「生きてた！」」」

「勝手にこーろーすーなぁあああ！！」

城之内は早速クラスに馴染みきっていた。

「もうやだ…生きるのに疲れた…」

俺はあれから千冬様からの有り難き説教を廊下で受ける羽目になった。なんでだよ…俺はただボケに向けてツッコミをしただけなのに…

「大変だったな。えーと…城之内でよかったか？」

「ん？」

俺は頭を上げる。そこにはこの教室で始めにできた友達だった。

「あぁ、城之内で良いぜ。お前の名前は？」

「俺は織斑一夏。千冬姉の弟だよ」

え？今なんて？

「まぁ、仕方ない反応だよな…」

一夏は頭を押さえて考え始める。

「その…ごめんな。千冬姉のせいで迷惑かけちまったみたいでよ」

「いや、別に大丈夫だが…」

一応、千冬様は俺の命の恩人？にあたるわけだし、こっちに来てからは千冬様に頼りぱなしだ。

「それなら良いんだ。同じ男のＩＳ適合者として仲良くしていこうぜ」

「だな。よろしくな一夏」

「よろしくな城之内」

俺と一夏は握手した。

すると一夏は何かを思い付いた様な顔になった。

「んじゃ俺の友達を紹介しないとな。話し相手は居た方が良いだろ」

「あぁ、ダチが増えるのは大歓迎だぜ！」

「ならな…箒、セシリア。ちょっと来てくれ」

一夏の号令に二人の女子がやって来た。

「なんだ一夏。私に何か用か？」

「何なんですの？」

やって来たのはこれまた美少女だった。千冬様といい一夏の周りの女子のレベルは凄まじく高いな。

「紹介するよ。黒髪のリボン着けてんのが篠ノ之箒。俺の幼馴染みで、金髪の髪を巻いてんのがセシリア・オルコットだ」

「むっ、編入生か」

「一夏さん。これはどういうことですの？」

「だって城之内編入したばっかで仕方ないけど友達が俺しかいないのはなんか嫌だろ。だからお前らも城之内の友達になってやって欲しいんだ」

確かにこの男子二人の環境で友達作りは辛い。何て言うか肩身が狭くて動けない感じだ。

「まぁ、しかしなんというか…柄が悪いと言うか…」

「不良は卒業してるつぅの」

「女尊男碑についてどうお考えですか？」

「はぁ？」

セシリアさんだったけな？突然真剣な顔で聴いてきた。なんと言うか真剣に答えないといけない雰囲気だな…

「別に…同じ人間なんだし仲良くなりゃ良いのにな…て思ったけど…」

「では女性が憎いですか？ＩＳが使えるだけで権力を振る舞う女性が」

「お、おいセシリア…」

「一夏さん。すいませんが邪魔しないで下さい。わたくしはどうしても聞いておきたいのです」

「憎いって…別に考えたこと無いけどな…確かに権力使ってふんぞり返るのはムカつくはムカつくけど…憎いなんて考えないな」

「……分かりましたわ。失礼な物言いで悪かったと思います」

セシリアは一礼して去っていた。

「いったいなんだったんだ？」

「あ～…城之内、セシリアを悪く思わないでくんないか？アイツは

男が基本的に信用できないんだ。ほら、女尊男碑になってから女尊男碑反対のテロ活動してる男達とかいるじゃんか。あれが嫌いなんだと」

「そういうことかよ。下らねーことする奴等も居るんだな」

それは男嫌いになっても無理無いな。正直俺もそんな男とは友達になんかなりたくねーしな。

「これは是が非でもセシリアとダチになりてーな。あの様子じゃまだ心許された訳じゃ無さげだしな」

「あぁ、頼むよ城之内。セシリアの友達になってやってくれ」

「…どうやら一本筋は通っているらしいな」

俺と一夏が握手してたら今まで黙っていた篠ノ之が突然口を開いた。

「正直友達云々は迷っていたが貴様みたいな奴は嫌いではない。私とも友達になってくれ」

「お、おう。よろしくな篠ノ之」

「そしてセシリアとも友達になってくれ。あれとは…その…」

篠ノ乃は頬を赤らめながらゴニョゴニョし始めた。なんとも愛らしい姿だこと。

「…ライバルだから…な…」

なるほど

「確かにライバルなら放っておけないよな。まかせな！男、城之内克也！必ずセシリアと友達になってやるぜ！」

俺は急いで教室を飛び出した。外には群がっていた女子が居たが無理矢理通してもらう。

そのまま廊下を全力疾走。出し惜しみはせず一気にトップスピードまでギアを上げる。

そして廊下の角を曲がった辺りであっさりとセシリアは見つかった。お互い目を見合って動けない。俺もこの瞬間普段は働かない脳細胞が動いた。

俺はここに来るとき、セシリアにデュエルを挑むつもりだった。なんたって今まで俺はデュエルで人との意志疎通を図っていた。しかし今は異世界。デュエルが総てじゃないんだ。

ヤバイ！！言葉が詰まった。

え～と…え～と…

「俺と闘えセシリア！！！」

俺は気づけばセシリアに指を指していた。

「・・・」

「ＩＳで勝負だ！！俺が勝ったら俺を信頼して貰うぜ！」

「……良いですわよ。時間と場所は」

「今から千冬様に土下座してくっから！その後にデュエルだ！いいな！」

俺は急いで千冬様に会うために再びトップギアで走る。

何処ですか千冬様ー！！

「おかしな方ですわ」

セシリアの残した言葉は城之内には届かなかった。

2　友達と決闘の約束（後書き）

次回か次次回で城之内ｖｓセシリアです。

3　弟子入りと奴隷確定（前書き）

千冬様と城之内の絡みは書いてて楽しすぎる。

3　弟子入りと奴隷確定

「オルコットと勝負させてほしいだと？」

セシリアと決闘の約束をした俺は急いで千冬様を探しだし早速土下座して決闘の申請を出していた。

「はい！セシリアと闘いたいんです。お願いします！」

「ふむ…理由はなんだ。答えろ」

「はい。ダチになりたいからです」

「ダチ…？何故闘ったらダチになれるんだ？」

「俺、城之内克也を認めてやらせたいからです。城之内克也なら信頼できるって、友達になれるって…」

「なるほどな…だが言わせて貰えばオルコットは強いぞ。少なくとも今のお前では勝ち目は０だ。それでもやるか？」

千冬様の視線は正直怖かった。だが俺は逃げるわけにはいかない。絶対ダチになってみせる。

「はい！」

「…良いだろう…明後日に丁度グラウンドでの模擬戦を行う。そこで闘わせてやろう」

「あ、ありがとうございます！！」

俺は勢いよく頭を下げる。難関はクリアした。後は頑張るだけだ！

「だが…」

「？」

へ？まさか条件付きすか…靴を舐めろと！

「いや、靴を舐めれたら汚れるからいい。決闘と言っても授業だ。織斑の時は授業ではなかったためあまり教えなかったが…あまりボコボコにされても授業にならん。城之内。貴様には私が直々に稽古してやろう」

「は…マジすか…？」

聞き間違いでなければ今千冬様から直々に稽古を受けさせてくれると

「あぁ、どうだ？私から稽古を受ければ貴様はある程度オルコットと張り合う程度には闘えるようになると誓ってやろう。私の稽古、受けるか」

これは…とてつもないチャンスなんでは無いのだろうか…正直俺には飛行方法すら分からない。これを受ければ俺は…セシリアに勝てる…

「はい！お願いします！！」

「なら確認だ。貴様はこれから私の弟子…いや奴隷だ。私が右と言

ったら右を向き、私が左と言ったら左を向き、私がＹＥＳと言えばＹＥＳと答えろ。そんな覚悟があるか？」

「あります！俺には手段を選べる程余裕は有りませんから！」

即答した。千冬様の作った逃げ道になんか入らない。俺は絶対セシリアとダチになるんだ。そのためならどんなことだってやってやる。

「…ふっ…良いだろう城之内…放課後にここに第５アリーナに来い…勿論ギャラリーは無しだ。口外もオルコットとの闘いが終わるまでは厳禁だ。いいな！」

「うす！！」

待ってろよセシリア。テメーの居る場所まで絶対追い付いてやっからな

「あ、最後に」

「へ？」

「私は弟子をとったことがない。死んでも文句は言うな。良かったな異世界で」

実に溌剌とした顔でえらい物騒なことが聞こえたんすけど！え？死？

「ちょ！千冬様！タンマを要求します」

「おかしいな。貴様はもう私の奴隷で私は貴様に発言権を許した覚えはないが。城之内」

「チクショー！」

後悔しないと決めて1分立たずに後悔した。けっして俺の意思が弱いわけではない！絶対だ！

さて、千冬様のどれ…弟子になるのが決定した俺は早速授業にせいを出していた。

正直言っている内容はちんぷんかんぷんだが千冬様からのお達しなのだ。俺に拒否権は存在しない。

これもセシリアのダチになるためだと割り切れるし、一夏も授業は真面目に受けてるぽいからな、俺も精一杯頑張ろう。

そして昼休み。一夏と篠ノ之に昼飯に誘われたが断った。セシリアとダチになってから行くと言って俺は千冬様の居る職員室に来ていた。

「座れ」

シュバ！！

「さて、呼んだのは他でもない。貴様には時間が無いからな。荒療治だ」

「荒療治？」

「そうだ。貴様は織斑以上にＩＳに対する知識が不足している。よって今から…」

ドスン！という擬音が聴こえる程に分厚い辞書みたいなもんが置かれた。

「あの…これは…？」

「貴様にはこれを詰め込む。これを詰め込めば知識不足にはならん」

「これを…」

俺の目の前に置かれた辞書？は推定だが…１０００ページ以上ある。

「さ、詰め込むか」

千冬様は立ち上がり俺の顔を掴む。何するつもりなんだ！

「安心しろ。少し詰めるだけだ」

「詰めるって何を！教えてください！」

「知識だ。面白そうだろう。実は新開発の記憶術があるんだがな」

「ふんふん」

「計算結果からこれを使用した者は２日で衰弱死してしまうらしい。しかしここには無駄に精神力と生命力を持ったモルモットがいるで

はないか」

そんな…確かに俺は臨死体験を二回ぐらい経験してますが…

「そうら…カ・ク・ゴ・ヲ・キ・メ・ロ・」

「いやぁああぁあぁああああああぁああぁぁああぁいあああああぁああああああぁああああああぁああああああぁああああああぁああああああ゛あぁああぁぁああぁいあああああぁあああああぁああぁあぁああああああ゛あ゛あぁああぁぁああぁいああああぁああぁぁああぁいあああああぁああぁぁああぁいああああ！！！！！！！！！」

「・・・・」

この後授業、城之内は生ける屍と化していた。

俺が目を醒ましたのは授業終了のチャイムがなるのと同時だった。記憶には先ほどの記憶術によって詰め込まれた記憶の数々だ。どんな方法だったたか聞かないでくれ。

「恐ろしい…」

「大丈夫か城之内！？意識が戻ったんだな！」

「一夏か？」

どうやら新しいダチは俺の心配をしてくれたらしい。

「お前がうわ言で前世の罪を懺悔し出した時は諦めかけたがな」

「俺そんなヤバイことになってたの！」

前世の罪って…何なんだ！俺は何を懺悔してたんだ！！確かにデットゾーンに片足突っ込んでたらしいが今はこっちが気になる！

「俺は何を懺悔してたんだ！教えてくれ！篠ノ之！」

「えーと、確か…「俺は凡骨です。認めきれなくてすいません」だったかな？」

「前世の俺！！」

悔しい！俺は前世でも凡骨呼ばわりされてんのかよ！後認めるなよ！！

「そう言えばもう放課後だよな」

「ああ、千冬姉に城之内を起こすように頼まれたんだ」

「そうなのか…迷惑かけちまったな」

あー、これから俺は生きて帰られるのかな…

「んじゃ、また明日な一夏、篠ノ之」

「あぁ、またな」

俺は一夏と篠ノ之と別れて千冬様が言っていた第５アリーナに急いだ。

さて、アリーナについた俺を待っていたのは出席簿と…大剣片手に佇む千冬様だった。

「遅いぞ城之内…いや奴隷」

「くっ…すいませんでした。あの記憶術の影響で三途の川を散歩してましたんで」

「なるほど、それでは始めるか…城之内ここに直れ」

千冬様は背後に用意していたホワイトボードを前に出した。俺はそれを見上げる形で見る。

「さて、先ずは貴様にＩＳ戦闘においてのポイントを把握させなくてはな」

千冬様はマジックペンでホワイトボードに文字を書いていく。

「ＩＳの戦闘に勝つためのポイントは全部で３つだ。先ず１つ目はシールドエネルギーの残量調整。ＩＳはシールドエネルギーが切れたら敗けだ。そして攻撃や防御にもシールドエネルギーは使用される。よってシールドエネルギーの管理は重要になる。シールドエネルギーの残量を見ながら戦闘スタイルを変えることも重要だ」

千冬様はホワイトボードにペンを走らせた。

「例えば、貴様が近接近型のＩＳを使う場合は残量の多い内は怒涛の攻めで相手のシールドエネルギーを消費させ、暴れてシールドエネルギーが心元なくなった場合は後手に回り相手の隙を突く。など近接近型だとしてもシールドエネルギーの残量で闘い方はガラリと変わる」

「なるほど…」

「次は相手の癖の把握だ。これはＩＳと行かなくとも全スポーツ及び競技に必要な要素だ。闘いにおいて情報は出来る限り多いに越したことはない。情報収集も闘いの一環と言っても過言ではない」

「確かに…」

デュエルにおいても情報はかなり有利に働く。手札確認なんかされたら戦術は筒抜けだ。

「そういうことだ。そして最後は…」

千冬様はホワイトボードに書くのを止めてこっちを向かれた。

「一歩を踏み出す覚悟だ。大事な場面や仲間が危機に陥ってしまっている場面で自分の意思を突き通す覚悟。これを持ち得ない奴に真の強さは手に入らん」

「・・・」

「城之内。貴様にはその覚悟があるか？恐怖に立ち向かい闘う覚悟が、誰かを守るために闘う覚悟が…あるのか」

この質問には…

「へへ…その質問はおかしいすよ千冬様」

「？」

「俺は大切な何かを守るために力が欲しいんだ。俺の大切な仲間を守るために力がいるんだ。俺は最初からそれ以外の力を望んでませんよ」

それ以外の力を力と呼びたくない。俺は今までの俺を否定する気なんてサラサラない。

「そうか…どうやらお前のその点だけは評価しなければならないらしいな」

千冬様は満足そうに息を吐いた。俺はと言いますと千冬様に認めて貰えたことに対する喜びに体を奮わせてしまっていた。だってあの千冬様だぜ。暴虐非道教師の千冬様に認めて貰えたんだ。喜ばないはずない。

「それでは早速始めるか。城之内。ＩＳを起動させろ」

「おう！起動しろ！『デュエルモンスターズ』」

俺は白紙のカードから生まれた腕輪型のＩＳを起動させる。

そこには真っ白のボディ、それ以外に特徴が一切ないＩＳがあった。

「いつ見ても思うが…本当に特徴がないな。しかも性能は第２世代型のＩＳ以下。雑魚中の雑魚だな」

「あんまりばっさり言わないでください！」

うう…俺だって泣きてーよ！専用機って言ったら少しは何か特徴があって良いと思うんだが俺のＩＳは一切ない。皆さんの思い描く普通の体現みたいな姿だ。

「しかし貴様のが専用機であるならまだ進化の可能性がある」

「進化の可能性？」

「あぁ、ＩＳには段階があり、初期形態、第１形態、第２形態の順番に進化をするのだ。貴様はまだ起動させて日が浅い、もしかしたらまだ初期形態なのかもしれん」

「と、いうことは…かっこよくなるんだな！」

「…まぁ…その解釈で良いだろう。だがそろそろ第１形態になってもおかしくは無いのだがな」

「へ？」

「大体初期形態から第１形態までの進化には時間はかからん。そして第２形態への移行はそれぞれで不規則なんだ。まぁ、フリーザ様みたいにポンと進化できる訳ではない」

そ、そんな～、上げて落とされた気分だ…

「しかし…そうだな…城之内。ＩＳの内部を解析しろ」

「ＩＳを…解析？」

「データを閲覧しろと言っているんだ。もしかしたら何かあるやもしれんぞ」

「なるー！」

そうと決まればフンフンと。

「何々？『情報閲覧拒否』…」

「どうだ城之内」

「『情報閲覧拒否』ですって…」

沈黙する俺と千冬様。俺もまさか不可なんて結果になるなんて予想してなかった。

「ＩＳにまで見捨てられるとは…流石は凡骨だな」

「すいません。一人称は城之内でお願いします。でないとわりかし本気で泣きます」

「なんと…貴様の涙なんて流されたらアリーナにシミが着いてしまうではないか」

「泣くよ！！本気で泣きますよ！」

目の下に溜まっているのは断じて涙ではない。これは汗だ。

「まぁ…閲覧拒否など舐めたＩＳだな。…壊すか」

「いやいやだからおかしい！」

「しかし情報が分からんのではこちらも戦略の立てようがない。今のこいつは第２世代にも劣る程度だしな…」

千冬様は割と本気で指導してくれるらしい。正直安心した、だって弄られて１日終了なんて冗談にもならないヴィジョンが見えてたから…リアルに。

「どんな馬の骨でＩＳにすら棄てられた負け犬だろうが生徒なのは生徒なのだ。どんなに不本意であろうと全力を尽くさねばならないのが教師のジレンマだ」

「酷くね！ジレンマって何！俺の扱い酷くね！」

「大丈夫だ城之…凡骨。私はスパルタが得意だからな。生徒の調教はお手の物だ」

「何で名前で言いかけて凡骨に変えるんだよ！それに俺はサーカスの動物か何かか！！」

「ふむ…ペットだな」

ペット…つまりそれは…俺の人権は…

「奴隷兼ペット。お前は天性のドMだな」

「どっかの誰か様のせいでな！！」

前の世界の方がまだ扱いが良かったぞ！海馬より毒舌な美人ってどうよ！ご褒び……いや！俺は断じてドMじゃない！あってたまるか！

「まぁ、真面目な話貴様には今、道が2つある」

「道？」

「1つはそのまま性能が分からない機体の隠された力に期待して闘うか、それとも打鉄かラファエルで闘い、確実にじり貧になり負けるの2択だ」

それって

「先ず選択肢1では貴様は開始早々敗北する可能性がある。ネタバレになるがオルコットの機体には優秀な射撃武装が多い、今の貴様では避けられず被弾しまくり負ける。そして選択肢2なら負けるのは確定にしろ善戦は出来る。認めて貰いたいなら選択肢2が一番効果的だ」

つまり千冬様は俺に僅かな可能性に全部賭けるか、魅せるだけ魅せて負けるか、て言うことだろ。

「悪いけど千冬様。俺はやるからには勝つがモットーなんすよ！それに諦めて魅せるなんてんなめんどくさくて器用なことバカな俺にはできませんよ！」

「あぁ、もし選択肢2を選んだら殺してやろうと思っていたが…やはり固いな。お前の信念は」

どうしょうもないバカなのが玉に傷だな。後に続いた千冬様の皮肉は、千冬様の満足そうな表情で帳消しだな。

「よし！試合までに間に合わせるぞ！しっかり着いてこい」

「は、はい！」

待ってろセシリア。絶対にダチになってやるからな。それまで胡座でもかいて待ってやがれ！

3　弟子入りと奴隷確定（後書き）

次回はｖｓセシリアさんです。城之内のＩＳは雑魚中の雑魚です。

まぁ…進化するんすけど…パイロットが凡骨じゃ…な…

下手こくと一夏より弱いすよ彼。

4　戦闘開始と決闘者の呪い（前書き）

今回はあまりチェックが出来てませんので間違いが多いと思われます。指摘お願いします。

4　戦闘開始と決闘者の呪い

あれからまさに地獄と言う比喩が正しい千冬様の虐め…特訓を肉体面も精神面共に奇跡的に生き延びた俺は後は試合を行うアリーナに入るだけだ。思えば長かった…セシリアとダチに成るために始めた特訓。休み時間の度に記憶を詰め込まれる地獄。一夏と箒からの心配の眼差し。セシリアからの挑発。俺は耐えてきた。鋼鉄の精神でそれらの試練に耐えてきた。今の俺には死角なんて存在しない。

「勝てる！！」

「どうした奴隷？遂に沸きに沸いた膿が漏れ出てきたか」

「少し自分を勇気づけただけっすよ！！一々揚げ足を取らないで下さい！」

「そうか、それは悪かったな。しかし凡骨奴隷」

「遂に融合した！！」

凡骨奴隷って…使えない奴じゃん！

「凡骨の時点から使えん。凡骨なら凡骨らしく足掻くだけ足掻け。私はそれをお前に教えてきたのだからな」

「分かってますよ。足掻くだけ足掻いて」

「勝てよ」

「わーてますよ」

俺としても千冬様の看板背負っている身なんでね。簡単に敗けるわけにもいかないし、何よりも敗ける気もない！

するとピットに山田先生からの通信が入る。

『城之内君。準備は出来てますか？』

「はい！」

『なら出撃して下さい。すでにオルコットさんは出撃してますよ』

あ…ついに来た。

「行ってこい奴隷」

千冬様も相変わらずの毒舌で俺を送り出す。弟子の初陣なんだ。もっと然るべき態度がある気がするが別に良いや。

俺はすでに起動させた『デュエルモンスターズ』を纏いながらピット排出口まで歩く。

「んじゃ、行ってきますわ千冬様」

俺は千冬様に手を振る。千冬様に恥をかかせはしない。こんな不出来な弟子ですが貴女を尊敬する気持ちはクラスの女子より上だと自負がある。

俺はピット排出口に辿り着き腰を落とす。

「準備完了しました山田先生」

『分かりました。発射シークレンスを開始します』

さて、頑張りますか

そんな時、突然千冬様が口を開いた。

「ふむ…城之内」

「なんすか」

「・・・・」

「!?!」

俺はピットから勢いよく飛び出した。

「行け、我が弟子」

俺の頬は最後にかけて貫った言葉ににやけぱなしだった。俺はあの人に弟子として認められたんだ。

俺が飛び出した先にはすでにセシリアが飛行していた。その飛行ひとつみて俺との格は明らかだ。流石は代表候補なだけはある。

「さて、先ずは逃げずに来たことを褒めて差し上げますわ」

うわー、早速嫌味から入られた。しかしそれは千冬様に奴隷奴隷、凡骨凡骨言われ続けてきた俺には通用しない。今の俺なら海馬の嫌味にだって耐えられる。海馬の嫌味と千冬様の嫌味はレベルが違う。バカにするのではなく、精神にダイレクトアタックを決めてくるだ。

「そうかよ。こちとざお前とダチになるために頑張ってきたでな」

お前は『デュエルモンスターズ』から実態剣を出現させる。西洋剣をモチーフにした両刃にＩＳの剣としてはやや小さめの刀身を持っている。

「あら、随分お粗末な剣ですわね」

「うっｓ…！」

くっ！千冬様の教えの１つの『怒りを静めて、静かに怒れ』を早々に破ることになっちまった！すみません千冬様…

取り合えず深呼吸だ。怒りを静めろ。内心怒り心頭でもそれを静かに燃やすんだ…

「落ち着いたぜ」

「そうですか…なら踊りなさ「ハァアアアア！！」！？」

セシリアがお馴染みの台詞を吐くその瞬間

「ハァアアアア！！」

「なっ！？」

城之内は怒号を上げながら全速力でセシリアに突撃していた。

セシリアは初手から城之内に完璧にペースを握られてしまい反応が遅れる。

「オラァアアア！！喰らいやがれぇえええ！！」

城之内は手に持った剣をセシリアにふりおろす。狙いはセシリアの肩口だ。

「くっ…」

しかしセシリアもギリギリ反応し城之内の奇襲を完全とは行かずともかわしてみせた。

「ちっ！…ハァア！」

城之内はそれでは終わらず噛みつかん勢いでセシリアの間合いに侵入する。

セシリアもそれに対抗せんと体勢を気にせずフルパワーでバックし城之内の間合いから脱出する。

「……」

城之内はそれを確認すると逆にセシリアから離れていった。さっきまでの勢いは完全に殺し、自分の技能と機体の性能では追撃は不可能と判断しろ。城之内は千冬からの指示を思い出していた。

『貴様が勝機を掴むには先ずは先手は絶対に取れ。これがとれなければ貴様は敗ける』

あれは弟子入り初日だった。千冬様は勝つために守らなければならないことを教えてくれた。

『理由はオルコットのＩＳの特徴にある。あれのＩＳは遠距離からの射撃戦を得意としたＩＳだ。あれ自体の射撃センス悪くない。よってＩＳとの相性も悪くはない、いや最高だ。』

みなさま聞いただろうか？あの千冬様が人を褒めましたよ。セシリアを褒めてますよ。明日は嵐か何かですか？

『だから勝機は先手だ。あれが射撃体勢を整える前に間合いを詰めろ。そして攻めろ』

『はい！』

『そして一度詰めた間合いを離されたら後は逃げろ。先手で決めれなければ勝ち目は無い。一度逃がしてしまったならキッパリ諦めろ』

『な…なんでですか？一度詰めれたらなまた追えば…』

『貴様のＩＳが第３世代並の性能があれば…な。しかし貴様のＩＳにあれを追いかけるのは不可能だ。根本的性能の違い過ぎる。バイクに自転車で挑むのと一緒だな』

うわー…勝ち目０じゃん…そこまで違うもんなのか？

『普通の第２世代でも操縦者次第で追撃は可能だ。しかしここに居るのは唯の凡骨だけだ。勝つのは不可能だな』

もう一々凡骨に反応するのに疲れてきた…つか馴れたよ…

『しかし逃げるだけでは勝つのは不可能だ。これは自然の摂理だな…、敗けはしなくとも勝ちも無い。普通ならカウンター等を教えたいが生憎オルコットにカウンターは無意味だ。あれは近づいてこない』

『んじゃどうするんすか？俺は勝ちたいんすよ』

『貴様は忘れたか、元々この闘いの勝率は限り無く０だというのを』

ぐっ、確かにそうだった…千冬様ならとか考えてた自分を叱咤する。

『私でも凡骨を短期間を怠け天才に勝たせるには時間が必要だ。しかし今回は時間が無さすぎる』

『うっ…確かに…てか凡骨は止めてください！』

そろそろ心が張り裂けそうす。主にあなた様の毒舌とか毒舌とか毒

舌で。

『ふん、この程度の暴言に心が折れるとはな。凡骨の骨は極度にカルシウムが足りてないみたいだな。牛乳を飲め』

『カルシウムは足りてますよ！つーか俺の心は骨じゃねーし！！』

『当たり前だろ。貴様はバカか？いやバカに失礼か…』

『ドヂグジョオオオ！！！』

俺は泣きながら両手を床に叩き付ける。弟子入り1日経たずに心が折れました。ポッキリと根本からポッキリ逝きました。

『まぁ、話を戻すが、貴様が勝つにはそのＩＳの奇跡に賭けるしかない。これは決定事項だ』

『やっぱりそうすよね……』

『まったく…貴様は一々一喜一憂が激しすぎる。弱音とは口にするだけで気を弱める。言霊を知るものを口数を減らすものだ』

『言…霊？』

へ？なにそれ？

『それに弱音だけでなく怒りは戦闘においては爆発させるものではなく静めるものだ』

『だ、だけど怒ったほうが力が強いときも有るんじゃ？』

『武術を学ぶものは皆怒りを爆発させて、脳のリミッターを外し力を解放するタイプと、怒りを静めて、常に冷静に静かに闘うタイプと、２つの種類が存在する』

へ？武術？ＩＳじゃないの？

『ＩＳの最終的な勝敗は大抵は操縦者の力量だ。性能差等大して響かん』

『それなら『だが貴様のＩＳは性能に差が有りすぎる』？あ…』

『そうだ。今のＩＳは大体は第３世代が主流、あのバカ以外の専用機所持者は全員そうだ。そして同じ第３世代型のＩＳに大した性能の違いは存在しない。よって最終的には操縦者に勝敗が委ねられる。しかし貴様のＩＳは普通は存在しない絶対的で覆ることの出来ない性能差が存在する。これはあまりに致命的だ』

『確かに…』

『そこで今からお前には静を会得して貰う』

『なんでっすか？俺自分で言うのも何ですけどかなり切れっぽいすよ』

『動は怒りを爆発させるために大体は攻めが基準の戦法に向いている。しかし貴様が怒りを爆発させても勝ちはない。だから冷静に回避に向いている静を会得して貰うんだ。これが会得出来ればある程度は回避出来る。そこで貴様にはこれから座禅を組んでもらう。さぁ、組め』

『何故に座禅！？』

『座禅は精神を集中させるのに非常に便利だ。それにただ座っていてもらうほどの暇は貴様にはない』

やっぱりただじゃ終わらない人だな…

『今から貴様には脳内で試合を行ってもらう。私が貴様の試合の内容を喋る。貴様はそれを脳内でシミレートしろ』

『はい』

俺は座禅を組んで、頭の中を空にする作業に入った。

「（同じだ。あの座禅を組んでる時の無の感覚…この自分の中で自分が静まる感覚…この状態なら）」

俺は千冬様直伝の奥義？で薄皮1枚セシリアの攻撃を避けていた。大きく動かずセシリアを捉えながら最低限の動作で避けることでシールドエネルギーの節約になるし、セシリアが乱射してくれんならばんバイザイだ。

「（いける！）」

この状態を維持できれば…まだ勝機が…

「ならば…行きなさい！ブルー・ティアーズ！」

突然セシリアは射撃を止めて、背中のユニットを放出した。

「（なんだ一体…）」

ミサイルか何か？

そんな考えを浮かべたのは放出されたユニットから青色の閃光が迸る直前だった…

「なっ！？」

俺は手に持った剣で目の前のユニットから走った閃光を受け止めた。しかし俺の視角から抜け出していた３機のユニットからの攻撃は防げなかった。

「何なんだ！」

俺は左手に常時装備された実体シールドを構え直しながら精一杯ユニットから距離を離そうとするが離れられない！

「くそっ…」

城之内は走る不規則な４本の閃光をシールドと剣を使いながら防ぐも、ブルー・ティアーズの性能は『デュエルモンスターズ』より上で死角への侵入を防げない。

「さぁ、踊りなさい！」

「くっ！どうすりゃ…」

城之内は必死に奮闘虚しく城之内のシールドエネルギーは徐々に削り取られていく。

「城之内…大丈夫なのか…」

俺は観客席から城之内の試合を眺めていた。序盤こそは奇襲でペースを握り、紙一重でセシリアの攻撃を避けていたが、セシリアのブルー・ティアーズのピット攻撃に対応しきれていない。

「箒…城之内勝てっかな？」

「友が信用してやらんでどうする一夏。城之内を信用しよう」

「…だよな」

城之内、信用してるからな。だから絶対セシリアのダチになってくれよ…

「どうしました。それでは私には勝てませんことよ！」

「ぐっ！」

城之内はシールドで向かってくるビームを防ぐ。その度にシールドの表面は焼け焦げており、後僅かしかもたないのは城之内にも理解できた。

「（確かにこんまんまじゃ勝てね…）」

「そこですわ！ブルー・ティアーズ！」

「しまっ…がぁあ！！」

城之内の一瞬の油断をセシリアは見逃さない。ブルー・ティアーズのオールレンジ攻撃により吹き飛ばされる。

そんな中、城之内は自らのＩＳの語りかける

「（頼む…答えてくれ…デッキよ…）」

また１つ被弾する。肩の装甲を抉られる。

「（お前は俺のデッキなんだろ…だったら力を貸してくれ…俺は…俺は）」

次は太股の装甲が割れた。連鎖的に脹ら脛の装甲にヒビが走る

「（絶対に…俺に賭けてくれた一夏や箒、こんな俺に闘い方を仕込んでくれた千冬様…みんなに支えられてここまで来た…だから！）」

「力を寄越せ！！」

『ｃａｒｄｓ　ｓｉｓｔｅｍ　起動確認。データ照合。城之内克也と判断。コア、アームズ、ディフェンスの解放を認証』

城之内は光に包まれた。

『ここは…どこだ？』

何もない真っ黒な空間。俺はそんな場所にいた。

『なんなんだよいったい…俺はさっきまでセシリアと闘っていた筈なのに』

そうだ。俺はさっきまでセシリアとＩＳで勝負をしていたはずだ。

間違ってもこんな真っ暗な空間なんかではなかった。

俺は訳が分からずに辺りを漂う。

そんな時

『目覚めたか城之内…』

俺以外の声が響いた。

『なっ！誰だ！？』

俺は知らない声に怒鳴り付けるように問いただす。

『ふっ…そう言えば自己紹介がまだだったな。こうして会い見える

機会も無かったし、それに私はいつも貴様に話しかけていたが…いかんせん貴様が無視するのでな』

『なっ？俺に話しかけていた？』

『あぁ、私は貴様にいつも語りかけていた…しかし私の…私達の声はどう足掻いても貴様には届かんと諦めていたのだがな…どうしてチャンスが舞い込んできた。だから寄り代を求めていたＩＳに同調して貴様と言葉を酌み交わすために。その賭けは成功した。こうして私達は貴様に間接的ながら言葉を交わすことが出来るようになった。』

『意味わかんねーぞ！』

『やれやれ、凄腕の師に鍛えられても貴様は相変わらずバカなのだな…』

『なんで知らない奴にバカにされてんの俺！』

『それは私が貴様と常に共に居たからだ。まぁ、私は一時期貴様から離れていたがな…』

『ぐっ！つーかテメーは誰なんだよ！？いい加減姿を見せやがれ！』

『良いだろ。と、言うより私はすでにお前の目の前に居るがな』

はぁ？俺は何気無く首を上に向ける。

先ず目についたのは真紅色のルビーの様な眼。体は磨き抜かれた黒曜石を連想する。そして背に体のサイズは有ろうかと言う翼を持ち

し…竜…

俺はコイツを知っている。世界中の誰よりもこの黒竜を知っている。なんたってコイツは俺の…

『レッド…アイズ…？』

『あぁ、真紅眼の黒竜。城之内克也。貴様のモンスターだ』

『なんで…お前が…？』

『それは貴様が変わった…いや違うな、悩んでいたからだ』

『俺が…悩んでた…？』

『すっかり忘れていたらしいが貴様は自分の成長に限界を感じはじめていた』

そう言えばそうだ。ここ最近色々大変だったから忘れてた。俺は中々上がらない自分の実力に嫌気が差していたんだ…

『そうだ。貴様はそんな不安を払拭させるためにがむしゃらにデュエルを続けていた。そしてデュエルの本質である楽しむ気持ちすら…貴様は忘れていた』

返事が出来ない。

『仲間も忘れるほど視野は狭まり、自分を不安にするデュエルを、不安にならないために続けた。しかしお前は変われなかった。次第に俺達の間に合った繋がりすら蔑ろにした』

レッドアイズの言葉が否定できない。その言葉の一言一言が毒の様に俺と言う個を犯し始める。

『俺達はまるでデュエルに呪われているかの様だったからな…知らんかも知れんが貴様の妹も武藤遊戯、本田ヒロト、真崎杏子、皆貴様を心配していた。勿論俺達もだ』

『遊戯…本田…杏子…静香…』

そうだ。俺はこんなダチを持っていた。それは分かっていたのに…

『俺達が貴様と話そうと決断したのもそれのせいだ。あまりに見ていられなくなった』

『俺は…』

デュエルに…呪われて…いた…

『どうだ、自覚したか』

そうだ。俺は最初の気持ちを忘れて…いた。いつの間にかアテムや遊戯に追い付くのに必死になりすぎて…仲間もカードも蔑ろにした。

『憧れは使命感に変わり、使命感は度を過ぎれば呪いに姿を変える。貴様はアテムや遊戯の背中に憧れ…それが呪いまで昇華させた。しかし、貴様は大事な物を…貴様が前に見えていたものを見失った』

『……』

『俺達はそんなお前を見たくなかった。だから異世界の扉を開けた。デュエルの無い、いや、デュエルが全てでない世界を目指した。貴様をデュエルと言う鎖からはずしたかった』

確かに…この世界にデュエルはなかった。

『だから聞きたい。貴様はこの世界が退屈か？』

…退屈…違う。むしろ居心地は良かった…。デュエルは忘れていた…それはなんでだ？

『まぁ、その答えは保留だ。今はあのセシリアって奴の友達になるんだろ』

『保留って…』

確かにこの答えは今は出せない。俺じゃ出しきれない…

『それじゃ本題だ。ビックリな真実なんだが、貴様のＩＳは今だ正式に稼働してすらいない』

『はぁ？俺のＩＳが稼働してない！？』

『あれは俺達の力をＩＳに写し出す力を有している。しかし、今の今まで写し出す対象の俺達が力をほとんど失っていたんだ。想像以上に異世界への転移に魔力を持っていかれたからな、そして今さっき、やっと全員が写し出されるぐらいには力を回復した』

俺は貴様と会話出来るぐらいは力が回復したんだがな。レッドアイズは平淡と言う。

『それじゃ…』

『あぁ、城之内。共に行くぞ！』

なんて言うか…嬉しいな

『あぁ！行くぞレッドアイズ！！』

コイツらと一緒に闘えるのが…

確かに俺の心はデュエルに囚われていたかもしれない。今はデュエルから解放されているのかもしれない。だけど…今は関係ない。俺は俺なんだ。だから…

「今は考えるより…行動するだ！！」

世界に光が降り注いだ…

4　戦闘開始と決闘者の呪い（後書き）

千冬様ヒロイン計画

最近、千冬様に城之内を意識させるかさせまいか考えています。このまま主従関係を継続するか。それともツンデレ師匠化させるか悩んでいます。

一応ヒロインはラウラの予定です。銀髪眼帯は正義です。異論は認めん（キリィ）

次回は覚醒したレッドアイズと共に城之内はセシリアに挑む。解禁された武装で試合の流れを断ち切るも、代表候補生の実力に追い詰められる。

次回！蒼い雫ｖｓ黒き竜

デュエルスタンバイ！！

原作風次回予告でした～

5　外れた鎖とジョーカー（前書き）

クリスマスから４０分くらいたったから…

リア充もげろ！後ラウラサンタにその体をプレゼ〈フタエノキワミ！アッー！

5　外れた鎖とジョーカー

城之内が光に包まれるのは前触れの無かった。セシリアの攻撃を受けきるしか出来なかった城之内のＩＳの放った光。その光は試合を停止させるには威力は十分だった。

アリーナの応援席から見ていた俺達さえも今までの喧騒は何処と静まり返っていた。

しかし、その光は一瞬で剥がれっていった。

剥がれた場所から見えるのは黒曜石の様な漆黒のパーツ、まるで竜を彷彿させるような翼、鋭く鋭利な爪。そして…

「試合再開だぜ！セシリア！！」

瞳が真紅に染まった城之内が居た。

「…ＩＳの姿が変わった…」

「あぁ、今までの奴は正常に起動してない状態だったんだ。今のこれが『デュエルモンスターズ』の真の姿だぜ」

「なっ！？」

セシリアは黒竜を連想させるＩＳに目をやる。その姿を見れば解る。

彼のＩＳは進化したのだと

「…くっ、ですがいくらＩＳが変わろうと貴方の敗北は必死ですわ！」

セシリアはバイザーを下ろし、手に持つ〈スターライトｍｋ?〉を構え直す。

城之内も左手のシールド、右手にレッドアイズと同調したことにより闇が張り付いたかのような刀身に変化した剣を構え直す。

『いいか城之内。俺との同調したことでこの機体は第３世代にも引けをとらないレベルの性能になっている。だからここはいつものお前らしく』

「あぁ…行くぞ！」

それが口火となり、２人の闘いは激化した。

「うらぁあぁぁあ！！」

城之内はシールドを構え、セシリアに突撃を仕掛けた。しかしセシリアはそれに遅れをとらない反射神経で城之内に弾幕を形成する。

しかし城之内はその弾幕に飛び込む前に

「シールドユニットカード！モンスター！『リトルウィンガード』」

城之内のシールドは分解され、城之内の目の前に小型のシールドが出現する。

「そのようなシールドで…」

セシリアはビームの雨を降らせた。

城之内の前面に出現したリトルウィンガードのシールドを模した盾は自動で城之内を守るために動き出す。

「自立制御型のシールド！？」

「行くぜ行くぜ行くぜ！！」

城之内は開ききっていた距離を詰めるためにブースターを入れる。

「くっ…だけど！」

セシリアは乱射していた光線を丁寧に纏め上げるように集中させる。

これほど一点に濃い弾幕を形成されれば、あまり面積の広くないリトルウィンガードのシールドは城之内を守りきれない。

「くっ」

城之内は詰めた距離を離さぬように、横と上下の動きを使ってそれを避ける。そして城之内は右手に構えた黒炎刀（こくえんとう）をセシリアに向ける。

「黒炎刀、モードチェンジ！ライフルモード！」

城之内の言葉に呼応する様に黒炎刀の柄が４５。の角度に曲がり、黒炎刀の刀身がライフルに変わる。

城之内はそのままライフルから黒炎色の光を発射する。

「なっ！？」

セシリアは突然の奇襲に体が一瞬硬直してしまい、そのまま光の直撃を浴びる。

「あなた…射撃武器を使えたのですわね。バカみたいに突っ込むしか能が無いのかと思っていましたわ」

「へっ！驚いたか！」

城之内は余裕満々に答えたが実際この射撃のヒットはマグレ以外の何でもない。何故なら城之内は千冬から射撃については習っていないし、そもそも城之内はあまり離れて攻撃するのが好んでいない。

『城之内。ライフルモードはもう使うな。今使ったら変な癖が付いて千冬教官から矯正を受ける羽目になるぞ』

「（な！？それを先に言ってくれよ！）」

『それに貴様は突っ込むことしか出来ないんだ。下手なことしないで突っ込め』

「（だけど、あの弾幕が越えれねーんじゃ）」

『コンボだ城之内』

「（コンボ？）」

『貴様のデッキのカードは何もモンスターだけでは無いだろう。マジックカードもあればトラップだってあった筈だ』

「（そりゃ入れるだろ）」

『それらのカードと俺達モンスターを連携させることをコンボと言うんだ。考えろ！今まで幾度となく貴様を救ってきたカードを』

「（俺の窮地を救った…防御のマジック……は！そうだ。あれが居た！）」

「行くぜ！リトルウィンガード！コンボカード！『スケープゴート』！」

城之内はカードを宣言した。その宣言により、リトルウィンガードが光に包まれる。その光の沈むとその先には４つとなったリトルウィンガードが浮遊していた。

セシリア「シールドが増えましたわ！？」

城之内「それじゃ行くぜぇえ！リトルガード！！」

城之内は黒炎刀を構えて、再びバーニアーをセシリア目掛けて噴射し、接近を試みる。

セシリア「くっ！」

セシリアもそれを迎撃するために〈スターライトｍｋ？〉から光の弾幕を降らせる。

「リトルガーズ！」

しかし、その弾幕は城之内の展開したリトルウィンガードとスケープゴートのコンボで生まれた〈リトルガーズ〉に阻まれる。

「複数自立支援型のシールドユニット…やっかいですわね！！」

「へっ！近付けたぜ！」

城之内は〈黒炎刀〉突き出す形でセシリアに急接近していた。周りには〈リトルガーズ〉も展開されている。

「くっ…小賢しいですわ！！」

セシリアは余裕を魅せようと自分を取り繕う。しかし、内心追い詰められている自分を叱咤していた

セシリア「（わたくしは一夏さんとの闘いで学びましたわ！そうでした…わたくしは何油断していますの！この闘いで力を抜くのは彼への冒涜でしたわ）」

セシリアは城之内の努力を知っていた。偶然千冬と城之内の特訓を見てしまったのだ。その特訓はセシリアの考えていた特訓の尺を破壊する程凄まじいものだった。

しかし城之内は逃げなかった。

少なくてもセシリアなら逃げ出してしまいそうな特訓をまったくの素人の城之内は逃げなかった。それは一重に自分と友達になるために彼は頑張っているのだとなぜか疑うこと無く理解できた。

セシリア「（わたくしと友達になるためにあの様な特訓を受ける…

それほど彼は本気ですわ…ならわたくしは…）」

目の前には〈黒炎刀〉を突き出す城之内の姿が写った。そのスピードは先までの鈍足なスピードでは無く第3世代として相応しいスピードだった。

しかし、本人にも分からない程、セシリアはその流星をしっかり捕らえていた。

クリアになる視界、思考と体が合致した様な感覚、指先の神経まで感じ取れる、ライフルを握る手から無駄な力が抜ける。

そして解る。

自分の撃ち抜くべき位置が解る。

城之内の剣が自らの最終防衛ラインを越えて自らの体を貫く瞬間にセシリアは体勢を少し下げて剣の側面に添えるようにライフルを置く。そして青色の弾丸は漆黒の体に突き刺さった。

城之内がそれを認識する前に再び、空色の閃光の矢を放ち、普段は使うことのない足を使い城之内を蹴り飛ばす。

ゼロ距離で行われた攻防。それには〈リトルガーズ〉は反応できなかった。

怠惰の天才は今、その翼を縛り上げていた鎖（油断）を棄てた。

「まさか…オルコットがゾーンに入るとは…予想外だ…」

千冬は手に持ったコーヒカップを啜りながら自分の弟子の闘いを見守っていた。

序盤こそ千冬の予想通りの展開、さらに城之内のＩＳの覚醒により活路を見出だした瞬間に、これだ。

セシリア・オルコットは天才だ。本人も言っていたがセシリア・オルコットは紛れもないエリートであり、その齢にして、運用の厳しいブルーティアーズを使いこなしていることから本人の非凡さを伺える。しかし故に怠惰的であった。

生まれながらの才に胡座をかいてしまっていたセシリアは結果的に予想より成長が遅れてしまっていた。

しかし、もしその鎖（たいだ）から解放され、油断を棄てた彼女はどうなるだろう？

その結果がこれだ。

苦手な突貫技に対しての完璧な対処。ゼロ距離により行われた精密で大胆な射撃。鎖を引きちぎった彼女に接近するなど今の城之内では不可能に近い。

「……くっ…」

千冬は無意識に舌打ちをする。いくら彼女により完璧に近い仕込み

を行われたと言えど、城之内には実戦経験が無さすぎる。恐らく城之内に勝機は無い。しかし、千冬は自分の弟子に期待していた。アイツなら何かする。

千冬は不確かながら不思議と確信に似た何かを持ちながら闘いを見守った。

『予想外だったな。まさかあの土壇場で弱点を克服してくるとはな』

「（はは、スゲーな。流石は代表だな）」

『代表ではなく候補生だがな』

しかし、とレッドアイズは言葉の糸を続けた。

『どうする。とても勝てる相手ではないぞ』

そんなの解ってるての、だけど唯で諦める程、きっぱりした性格じゃないんでね。

『損な性格だな。そんなんだから呪いになんか架かるのだ』

だろうな。だけどこんな性格だから俺は

「まだ勝負は着いてねーぞ！！セシリア！」

俺で居られるんだ。

わたくしの眼下には白式とは対の黒い翼を広げる黒竜が写っていた。どうやらまだ諦めてはいないらしい。まぁ、彼なら諦めないだろうと言うことぐらい容易に想像できた。いや、想像通りでした。ですからわたくしは…

「さぁ、来なさい」

油断を残したわたくしなら挑発の1つ飛ばしたのでしょうが、何故でしょうか？今はすべてがハッキリわかります。城之内さんの癖やわたくしのコンディション。すべてが手に捕る様に解る。

「今から行くからそこで待ってやがれセシリア！！」

城之内さんは恐らく〈リトルガーズ〉二機を前面に展開して、後の二機を自分の死角に配置するはず。彼の背後にはわたくしのブルーティアーズのピットを配置してある以上そうする以外にないはず。

ならばわたくしの取るべき行動は

セシリアは構えていたライフルをおろして、ピットの制御にすべての神経を削ぐ。

今のゾーンに入った彼女にとってピットは手と寸部違いない。一流のピアノ演奏者は手を意識せずとも、無意識下に正確に意識する正確に動かすと言われている。そして今のセシリアにとってピットは

手、この空間自体が鍵盤だ。

正確に、繊細に、緻密にピットを制御する。相手の行動の先の先まで見透かしながら確実に城之内を自らの制御下に置くために。

「行きなさい。ブルーティアーズ」

放つピットは六機。一夏との試合では奥の手として残しておいたミサイルピット二機も射出する。四機の自立支援型のシールドを持った城之内に対抗するには、数を城之内より増やす必要があった。

「なっ！六機だと！？」

城之内は〈黒炎刀〉と〈リトルガーズ〉を使い、ピット制御の為身動きが取れないセシリアに突貫を仕掛ける予定だったが、正確無比なピットのビーム攻撃とミサイルにより逃げに徹する羽目になる。

しかし、大きな致命傷になりえない被弾こそないが、確実にセシリアの猛攻は城之内のエネルギーを削り取っていた。

「くそ！」

城之内は〈黒炎刀〉でピットに攻撃を仕掛けるが、その全てをことごとくいなされ、逆に反撃を貫ってしまっている。完璧に試合はセシリアの手に掌握されてしまった。

そしてついに城之内の５００あったシールドエネルギーは２００の下に傾いた。

観客席に設置されたモニターには城之内のシールドエネルギー残量が映し出されていた。その結果はセシリアはまだ３９０と余力を残しているが城之内は１８３を示していた。

「不味いぞ。このままのペースで行けば１０分持たんぞ！」

試合は圧倒的と言うのが正しすぎる程、一方的なものになっている。城之内はセシリアに近づくことすら出来ず、セシリアの思惑通り動かされている。まるで詰み将棋だ。

「なんだってセシリアの動きが急に凄く成ったんだ？」

これが疑問だった。セシリアの動きは明らかに俺と闘った時とは比べられない程、格段に上がっていた。俺も今のセシリアに近付ける自信が無い。

「あれはゾーンだ」

「ゾーン？」

俺の疑問に答えてくれた幼馴染みの箒。確かに戦闘経験は俺の倍以上は持っているだろうから俺の疑問の解答を知っていた様だ。

「あぁ、普段人間はすべての力を使えている訳ではない。良くて五割程度だ。しかしゾーンに入った人間はその潜在能力をフルに使うことが出来、普段とは格段に上のパフォーマンスを行うことが出来る」

「それじゃ今のセシリアは…」

「あぁ、更にセシリアの場合はゾーンに入ることでいつもの無駄な動作が消えている。ゾーンに入ることで格段に上がった集中力により無駄な動作がカットされているのだろう。それらはゾーンに入って上がった分にプラスしてセシリアの動きを引き上げている」

「なっ！」

「セシリアの機体はピットの操作にかなりの集中力を労する。それは集中力が高ければ高いほどセシリアの機体は他の機体より力を増すと言うことだ」

「それじゃ城之内は！！」

「真の力を発揮したセシリアと闘っていると言うことだ」

そんな…そんなのに勝ち目が有るのかよ…。いや、何俺が不安になってんだよ。一番不安を抱えてるのは今のセシリアと対峙している城之内だろうが！

「頑張れよ城之内！！」

俺に出来るのはたとえ聞こえなくても精一杯城之内を応援してやることだ。あいつならやってくれる！俺は空元気だろうが城之内が勝つと信じる。だから勝てよ！城之内！！

「ぐっ！こなくそ！！」

〈黒炎刀〉の一撃が空を斬る。ピットを叩き斬ろうと試みるがその全てが無駄な徒労となって俺にのし掛かる。このまま試合の主導権を握られぱなしじゃ負けるのは目に見えている。〈リトルガーズ〉の防御も六機のオールレンジ射撃の前には翻弄されて仕事が出来ない。そもそも四機の〈リトルガーズ〉と六機のビットでは勝ち目が薄いのは目に見えて明らかだ。

「（なんとかなんねーのかレッドアイズ！？）」

『ふむ…無くはないが…この状況を一発で解決するなど無理だ。私の隠し玉もこの状況では無意味だしな…私単体のアビリティではまず不可能だ』

レッドアイズは近、中、遠距離全てに対応した万能機だが、得意範囲は近距離から中距離。遠距離に対応する武装は少ない。そして今の俺達は遠距離戦を強いられている。これではレッドアイズでも無理だ。

「（ならアタックウェポンに……俺のデッキで遠距離戦が出来る奴なんていたか？）」

『しかし耐久力を上げるアビリティを持った奴なら居るぞ。鋼鉄の戦士がな』

「！！そうか！」

一発じゃ逆転できない状況なんて慣れてんだ！だけどそのたびにコイツらとの絆で勝ってきたんだ！なら闘える！

「いくぜ！アタックウェポンユニットモンスター。〈鋼鉄の騎士ギア・フリード〉」

アタックウェポンの〈黒炎刀〉が光に包まれメタモルフォーゼしていく。光の殻が取れるとそこには鋼の槍が出現していた。薙刀に似た形状に刃の部分は盾と刃が融合した槍。銘は〈鉄（くろがね）〉その槍を掴む右腕は、槍を扱いやすくするために鋼の装甲が補助として着いている。

しかし、その分重量は高く、ＩＳの補助が有るにも係わらず確りその重さを感じさせる。

「今度は剣まで姿を変えるのですね。しかし、それになんの意味があるのでしょうか」

実際、この武装の真価はその耐久力。この武装を装備するだけで機体の耐久力を上げるのが〈鉄〉のアビリティだ。

しかし、変わりに機動性を削ってしまう。機動性が売りのレッドアイズならまだ隠蔽できるが、他の機体ならかなり影響が出てしまう。

ビットから放たれるビームを〈鉄〉で受け止める。しかし、鉄には傷すら付かず代わりに無意味を告げる狼煙が上がっている。

「へっ、まだ終わらねーぜ…耐えて耐えて耐えて…勝ってやるよ…」

そこから始まったのは、さっきより泥沼化の一歩を進む闘いだ。セシリアのビット攻撃を城之内が〈リトルガーズ〉と〈鉄〉で受け止め、止められなかった攻撃は上がった耐久力で受ける。

セシリアの攻撃で入るダメージは一分間に約１９。このままでは後１０分が限界だ。

全員が固唾を飲んで見守るなか、

ついに試合が動いた。

「ぐ…っああ！！」

試合を動かしたのはセシリアだった。

ビットのオールレンジ射撃に慣れ始めた城之内は逆転の一手を模索できるぐらいには余裕を持てるようになった。

そして、自らの硬直状態を解こうとセシリアの方を見た瞬間。

目の前からセシリアが視界から消えた。

「（！！しまった！）」

ハイパーセンサーには映っているが、城之内はまだハイパーセンサーに慣れていない。どうしても自らの視覚情報を優先してしまう。

そしてセシリアはそれに気付き、利用した。

突然だけど皆さん質問がある。皆さんにとって歩くと言う行為はどの様な感覚だろう？

私の予想なのだが恐らく解らないと思う。普段から行っているにも関わらずその感覚が解らないなんて不自然だと思うだろうか。答えは否。否だ。普段から行っているから解らないのだ。歩くとは下半身が自由な人間全てが持つ癖なのだ。皆さんは癖を意識していない。意識していないにも関わらず勝手に体が行う動作を癖と言うのだから、歩きながら別のことを行うなど皆さんには簡単だろう。しかも癖と言うのは集中している時にこそ、色濃く現れるものなのだ。

なら、手を動かしながら（操作しながら）歩く（移動）などなんの苦になる？癖を直すには労力と根気がいる。しかし癖を行うのには労力や根気等要らない。

「！？」

城之内の顔が驚愕に歪む。今までセシリアはビットを操作している最中に動くことはなかった。よって城之内はセシリアはビット操作中に動けないと踏んだのだ。

その予測は正しかった。セシリアは確かにビット操作中に動くことは出来ない。

しかし、それは以前の彼女の常識だ。今の彼女にその常識は当てはまらない。

セシリアはそのまま体を９０。傾けて城之内の真下に滑り込んだ。〈リトルガーズ〉が反応して動こうとするがビットのビームに反応してしまい真下に動けない。〈鉄〉の盾も真下には届かない。

そして、銃口から光が飛んだ。その光線が城之内を直撃する。避けれる訳が無かった。

何故なら真上からはビットからミサイルの檻を張られていたのだ。
そして遂に城之内のシールドエネルギーは１００の大台を抜けて、エネルギー残量５０以下を示すレッドアラートがハイパーセンサーに響き渡った。

「くっ…！」

撃墜された。

私の弟子が撃墜された。

その光景を見た私が感じたのは、どうしょうも無い、後の祭り、そんな無意味な怒りだった。

何に対する怒りか？それは勿論私に対する怒りだ。アイツは頑張った。私が断言する。アイツは頑張った…。私の師事を信じて行動していた。しかし私はアイツを勝たせてやれなかった…。アイツは私を信頼していた。その信頼を裏切った自分を呪った。

そしてもう１つ、私は生まれてこのかた世界を呪ったことが無かった。いや、まったく無いと言えばそれは嘘だ。少しは呪ったこともある。私の親友は知らんが、少なくとも私は自分を取り巻く理不尽な世界とやらが嫌いでは無かった。

しかし、私は…久々に世界を呪った。なんだこの世界は？この世界はアイツ…城之内が嫌いなのか？

突然こっちに引っ張り込んで、引っ張ったら引っ張ったで城之内に対してあまりに辛く、理不尽な試練を与えていくこの世界が私は少

し嫌になった。

「城之内君…」

「……」

真下と真上からの奇襲、一対一なのに起こった挟み撃ち。その両方が城之内の体に直撃した。しかもミサイルは城之内の翼に綺麗に吸い込まれていた。恐らく片方は使い物にならなった筈だ。

これで勝負ありだ、今のオルコットは確実に勝利を狙うはず、よって接近はない。確実に空から狙撃で勝負を決めにいくはずだ。

私はその光景を想像して、気付いたらマイクを握っていた。

『城之内…』

『は、千冬さん?』

『頑張れ』

『へぇ?あの、なん』

『負けるな。だから勝て、命令だ』

『…ラージャ…』

私はそれを聞いてマイク切った。さて、世界などに負けるなよ?我が弟子よ

「元気出たぁあああああ！！！！！」

凄い出た！！早く立ち上がれよ俺の体！立ち上がるよ心！！お前らのご主人様は早く立ち上がりてウズウズしてんだよ！

「（起きろよレッドアイズ。再開だぜ）」

『立たないほうが良くないか？このまま闘ったって勝てんぞ』

「（はぁ？勝てない？んなん誰が納得した？俺は納得した覚えねーぞ。俺が諦めてねーんだ。例え可能性が低くても、零でも…俺は諦めねーよ。千冬さんと約束したんだ…足掻いて足掻いて…勝つってよ…）」

だから立てない訳が無い。この体が俺の体なら立てない訳も理由も無い。

だから！

「うおぉおおおおおおおお！！！！」

右のスラスターはイカれて白旗を挙げていた。すまねーが…後少し踏ん張ってくれよレッドアイズ！！

俺はイカれたスラスターもギリギリもったスラスターも限界速度で

セシリアに突撃を仕掛ける！ハイパーセンサーでも爆煙に包まれていた俺の姿は捉えられない筈だ！それにもし捉えられていおうが俺の行動は変わらない！俺の切り札（ジョーカー）はまだ切ってないんだ！！

「行くぜぇええ！！レッドアイズ！！」

「なっ！！」

ライフルを構えたセシリアの驚愕の声が響いた。ビットはまだ俺のさっきまで居た地点の周囲に展開されている。完全に振り切った！！恐らく俺のスラスターを見て判断したんだろうがあめぇ！レッドアイズの力を舐めんなよ！！

「取ったあぁあああ！！」

この試合で俺の掴んだ最後のチャンス！！セシリアが移動しなければ後三秒で間合いに入る。動かれても五秒で取れる！！そしてセシリアの放てる弾数は5から6。レッドアイズから与えられた情報は頭に叩き込んでいる。セシリアの指がグリップに掛かる。

1つ。ヒビの入った〈リトルガーズ〉の1つが受け止める。受け止めた〈リトルガーズ〉が粉々に砕ける。さっきのミサイルで一機破壊されているので残機は二機。そのすべてに大小様々なヒビが走っている。耐えてくれ！〈リトルガーズ〉！

2つ。〈リトルガーズ〉が射線に割り込む。何とか耐えてくれた。よくやった。休んでくれ…。

俺の視界外。ハイパーセンサーによって見える世界で〈リトルガーズ〉は静かに砕けた。

３つ。最後の〈リトルガーズ〉がガードする。しかし、その弾は〈リトルガーズ〉のどでかいヒビを直撃する。〈リトルガーズ〉は光を俺の進行方向から退かして砕け散る。全機墜ちた〈リトルガーズ〉は元の〈黒竜殻〉に戻る。今の俺に拾う余裕は無い。

４つ。セシリアの後退することで稼いだ時間に放たれた一撃。〈鉄〉のシールド部分を使い受け止める。〈鉄〉はスピアフォームとブレードフォームと言う二面性を持つ武装だ。ブレードフォームはスピアフォームの持ち手を消して腕にシールドブレードを展開する。これによりシールドの一面を持つ。俺はそのシールドを使い青い光を受け止める。

５つ。〈鉄〉の防御に物を言わせて突っ込む。右のスラスターは限界をとっくに迎えている。いまだに稼働しているのが奇跡…いや、レッドアイズが踏ん張ってんだ！なら俺だって踏ん張ってやる！！

そしてセシリアの最後の集中力が呼び寄せた逆転の一手！彼女はこの状況でビットを操作していた、流石にミサイル型一機が限界だったらしいが。それは俺を落とさんと凶弾を放った。凶弾は一秒も満たずに俺に吸い込まれていく。

動け！動け動け動け動け動け動け動け動け動け！！

千冬様から教わっただろ！最速の一手！秒速を越えた動き！今の俺にはセシリアの隣に音を越えて滑り込める！入り込め！食らいつけ！！手を伸ばせば届くんだ！！だから！！

動け！！！

「「城之内！？」」

俺と箒は席から撥ね飛ばされ、煙で見えなくなったアリーナに食らいついた。

さっきまで俺達の前で行われていた想像を絶する激戦に握り締めていた手は赤くなり始めてしまっていた。セシリアの集中力がなし得たビット制御下での攻撃。城之内の堅固な城壁の様な防御。そして一瞬の隙を突いた突撃。こんな激戦、他に無いのでは無いのだろうか？

「勝負はどうなったんだ！？」

「わからん！だか…」

箒が顔を伏せる。箒の言いたいことは解る。最後のセシリアの放ったミサイルは間違いなく避けられるタイミングでは無かった。

解ってる…だけど！城之内なら！

俺が藁にすがる思いでアリーナを見る。

そして、黒煙から一個の個体が煙を切り裂き飛び出てきた。黒い外甲に大破したスラスター。竜を連想させるＩＳ…城之内克也だった。

シールドエネルギー表示には赤文字で０と刻まれていた。

「そんな…城之内…」

俺と箒は倒れ伏した城之内に涙が出掛けたが、プライドを全開して堪える！アイツは頑張った！万人が笑っても俺は城之内の味方でいる。

そんな沈痛な面持ちでアリーナに顔を向けると。

沈んでいく青い雫が見えた。

セシリアの放ったミサイルの爆煙により黒に包まれた世界。セシリアはおのが放ったミサイルの衝撃にその身を震わせた。セシリアにはそれが自分のミサイルだと解った瞬間に驚愕と絶望に体を捻る。

そして聞こえたのだ。鉄がぶつかり合う音を。

「よう…」

友人に声を掛けるように絞り出された声の先には、ボロボロの装甲のＩＳ。表情は見えないが、勝利を感じさせる口元が見える。

「…あなた…」

イグニッションブースト。城之内の行った最速の一手の名だ。文字

通り、瞬間的に機体の限界速度を越えるスピードを出させる彼の師、織斑千冬の十八番。彼はそれを土壇場で発動したのだ。これこそが彼の切り札（ジョーカー）だ。

だから彼は今セシリアの隣で笑っているのだろう。

セシリアとの距離は零。一歩も無い。これほど距離が近ければ恐らく彼にもミサイルの爆発の影響は出ている。セシリアはそう判断を下した。そして自らのシールドエネルギーはいまだに３９０を保っている。一撃で削れる数値ではない。セシリアは勝利を確認して、ふと、彼の胸の位置を見て、顔から血が抜け落ちた。

黒耀石を想わせる装甲が竜の口のごとく開き、中でマグマの様に紅い炎がビッグバンを起こさんとばかりに凝縮して凝縮し、それを凝縮したブラックホール。

無理だ。耐えられない。あんなの３９０程度のシールドエネルギーなど一撃で喰らい噛み砕かれる。鮫の一撃を生身で受けるようなものだ。セシリアは必死に体を動かすが城之内の手が、足が、ブルーティアーズの装甲にへばり着いていた。

「黒炎…弾」

瞬間、セシリアと城之内のシールドエネルギーはマグマに焼かれ、刹那の間に焼き殺したのだった。

5　外れた鎖とジョーカー（後書き）

セシリア無双！！

彼女はやれば出来る子だ！だけど今回はゾーンに入っただけ。普段はみんなが知ってる彼女に戻るよ。後、代表候補生はみんな城之内では強く見えるよ。

ついでに城之内もゾーンに入ってますね。確実に。だから普段は…弱いｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5836x/

ＩＳ・真の決闘者の闘い

2011年12月26日01時55分発行